地質ニュース505号，46-51頁，1996年9月
Chishitsu News no.505, p.46-51, September, 1996

ライマン雑記(12)

副見恭子[1)]

ライマンと助手たち

1. 堅い絆

1993年，日本地質学会百周年を記念して出版された「日本の地質学100年」の口絵の「日本蝦夷地質要略之図」と「ライマンとその門人たち」は，どちらも，ライマンを語るのに欠くべからざる重要な資料である．後者は，トランシットをバックにし，ライマンを中心に9人の助手たちをとった写真で，外国人は言うまでもなく，現代の我々すら，白面の科学者たちの羽織・袴姿を物珍しく思う(第1図)．山際永三氏にいただいた写真のコピーに，多分祖父永吾が書かれたのであろう，添書がついていて，「明治13年庚辰5月8日平河町先生ノ宅ニテ」とあり，ライマン離日の年の初夏に撮影された写真と判明した(第2図)．全員および欠席者坂市太郎・賀田貞一・故三沢思襄の姓名・出身地・生年，月または月日が記載されている．前年明治12年12月3日に少壮27歳で病死した三沢の戒名・克襄院が特に注意を引いた．前列左側から助手を紹介すると，嶋田純一・山内徳三郎，ライマンの右が桑田知明・杉浦譲三・安達仁造，後列は左側から山際永吾・稲垣徹之進・前田精明・西山正吾で，坂・賀田・三沢，そして更に，秋山美丸と前田本方を加えると，ライマンが誇った地質調査チームが出来上がる．記念撮影以後40年間，ライマンと彼らの絆が益々強固になっていったのは，お雇い外人の中で異例に違いない．

1873年第一回北海道地質測量調査のスタートから，ライマンはいち速く助手たちに好感をいだいた．彼の少年時代，誰もが愛読したベンジャミン・フランクリン自叙伝の，勤勉・誠実・謙譲・温和等の徳目が，ヤングメンが持っている精神的文明，つまり武士道と類似しているのを発見した時，瞬く間に彼と助手たちの距離は縮まり，彼の喜びは，次第に信頼へと変化して行った．ウィリアム・クラークと教え子がキリスト教を通じて固く結ばれたのと対照的である．助手たちは，幕末士族としての素養があり，洋学に対する知識を有する者もいた．彼らが逆境にめげず，明治維新の激動期の苦難を潜り抜けてきたからこそ，ライマンのヒューマニティーや彼の激しい正義感をよく理解したのではなかろうか？　また人間ライマンの実像を誰よりも適確にとらえることができたのではなかろうか？　ライマンも1850年代，科学技術が急速に工業発展をもたらし，アメリカ社会が激変した当時，自分が抱いた理想をヤングメンの間に感じた．蝦夷の奥地での困難な踏査中，助手たちに地質や技術について教えるのが，唯一の喜びであった．そして日本最初の，いや東洋で始めての優秀なジエオロジィストを育成しようと心に誓った．南北戦争後のめざましい祖国の工業発展を思うと，新興日本に早急に必要なのは，石炭開発のリーダーだと，ライマンの意欲はいやがうえにも盛り上った．

ライマンと助手の絆はどれ程強かったのだろうか？監督権で火花を散らした根室紛争が収まり，一見暗雲が去ったようにみえたのも束の間，ライマンと開拓使の関係は，だんだん深刻化して行った．次の手紙はその頃書かれたものである．

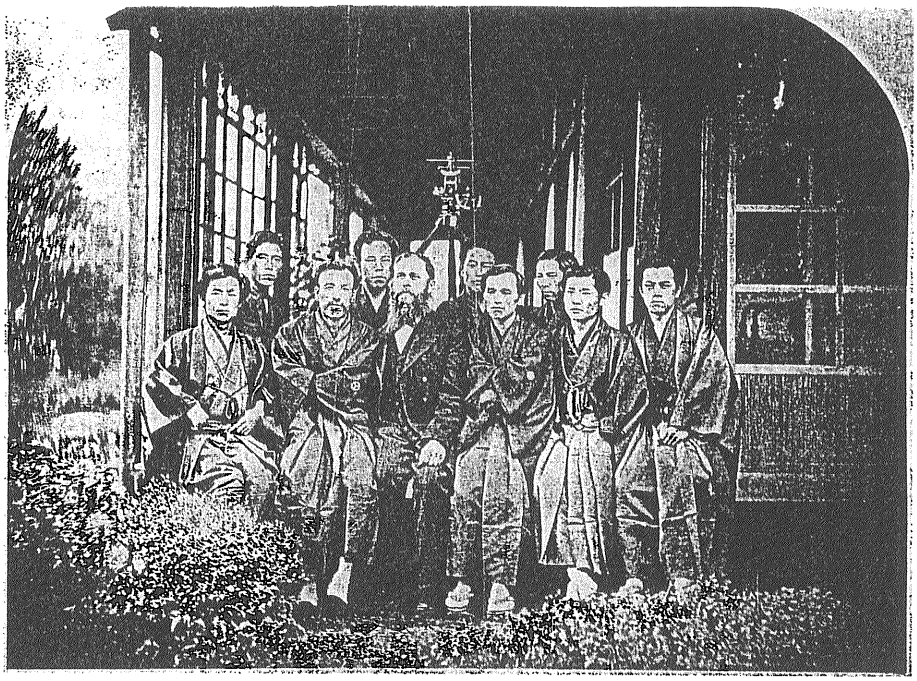
明治8年3月27日

Mr. 山内徳三郎

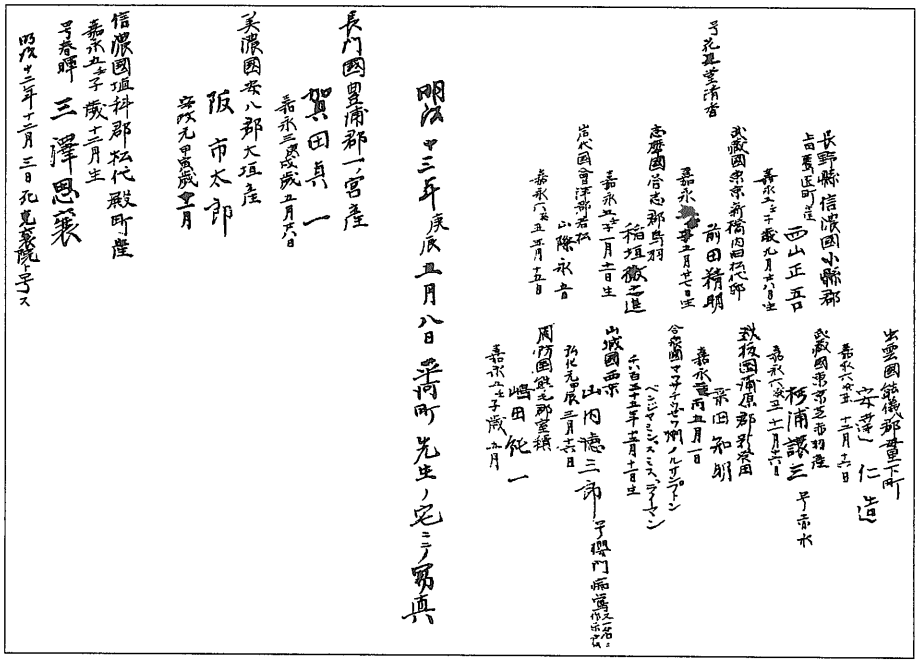
今朝，あなたの辞表を受け取りました．痛恨の思いです．私は，あなたを日本地質学の指導者として頼っていました．あなたは年長で，多くの経験や学問があるので，自然に助手たちのリーダー格でした．残念がるのは，幾分自己本位ですが…本当に眼病に悩まれるあなたを，お気の毒に思います．大したことでないよう願っています．

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員：
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U. S. A.

キーワード：ライマン，三沢思襄，蝦夷地質図



第1図　ライマンと助手たち



第2図　添書(山際永三氏蔵)

私も，今朝，2時間前に，辞表を提出しました．開拓使との頻繁な煩わしい交渉に疲れ果て，辞意を表しましたら，開拓使が私の願いを受理しました．この事が，あなたの将来の方針を左右するかも知れないと思い，また早急の件でないと信じ，あなたの辞表を当局へ送るのは，明日にしますから，もし必要ならば，それまでにお手紙を下さい．　敬具

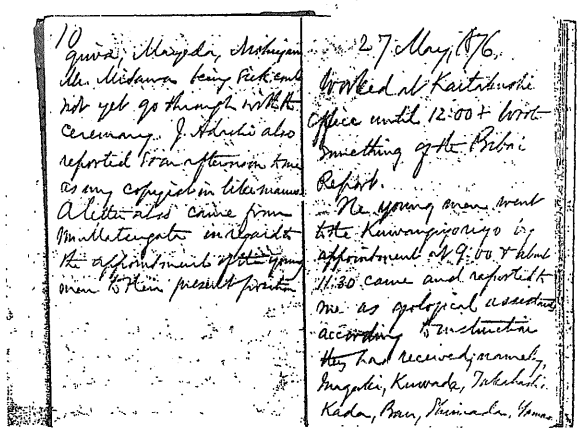
ベンジ・スミス・ライマン

驚くべき素直さ！　何と人間味のある手紙ではないか！　そこには，上下の差なく，ただ人間と人間のコミュニケーションあるのみ．読了後の山内徳三郎の感動が伝わってくるようだ．福沢諭吉の名句「天は人の上に人を造らず，人の下に人を造らず」は，夢でなく，実際に存在するのを彼は身を以て体験したのでなかろうか？「人間は生れながらにして自由かつ平等の権利を有する」が，ライマンの終始一貫した信念であった．

年の差が親子程あるケプロンは，仕事熱心な紳士ライマンの要求や依頼に助力を惜しまなかった．ライマンと開拓使の間が悪化した時も，彼が中に入り，ライマンのため折衝した．明治8年2月28日付ケプロンへの手紙でライマンは「うそと約束やぶりの開拓使」，カッコして（もう手緩い言葉なんか使っていられません．あからさまな英語を用いるのを許して下さい）と怒りをぶちまけた．彼は精神的に全く困ぱいしていた．しかるに，ケプロン離日約2週間前，彼も年末に帰国する身でありながら，助手たちの行く先を案じ，ケプロンへ嘆願書をしたためた．今回の彼らの北海道地質調査，いや，できれば，過去2回の調査シーズンを開拓使仮学校卒業生実習義務年限5年の中に適用して欲しいと説き，次いで彼が去った後，助手らが北海道の奥地でなく，石狩地質調査を続行できるようにと頼んだ．幸にして，嘆願は杞憂に終った．

明治8年から44年（1911年）に飛躍するが，36年後，フィラデルフィアのライマンを訪れた佐川栄次郎に，彼は次の様に語っている．「日本には都合8年いた．初め3年を北海道の調査に費した後，私は最早その仕事を好まず，帰国する考であったが，助手やその他の世話により，油田調査を始める事となって留まった」（注1）助手とは山内徳三郎，その他は，大鳥圭介と山内提雲らであろうか？　黒田清隆は，内務卿大久保利通へ手紙を書き，ライマンの内務省入りを阻もうとした．しかし，彼の旧幕臣や助手たちとの絆は，権力で持って一刀両断できる程もろくはなかった．

明治9年（1876年），2月24日に，ライマンは，内務省勧業寮でめでたく契約にサインした．越後油田調査旅行の準備と北海道地形・地質図作成の大仕事で，6月12日，出発日ぎりぎりまで，多忙な日々が続いた．その中の5月25日は，特筆すべき日であろう．

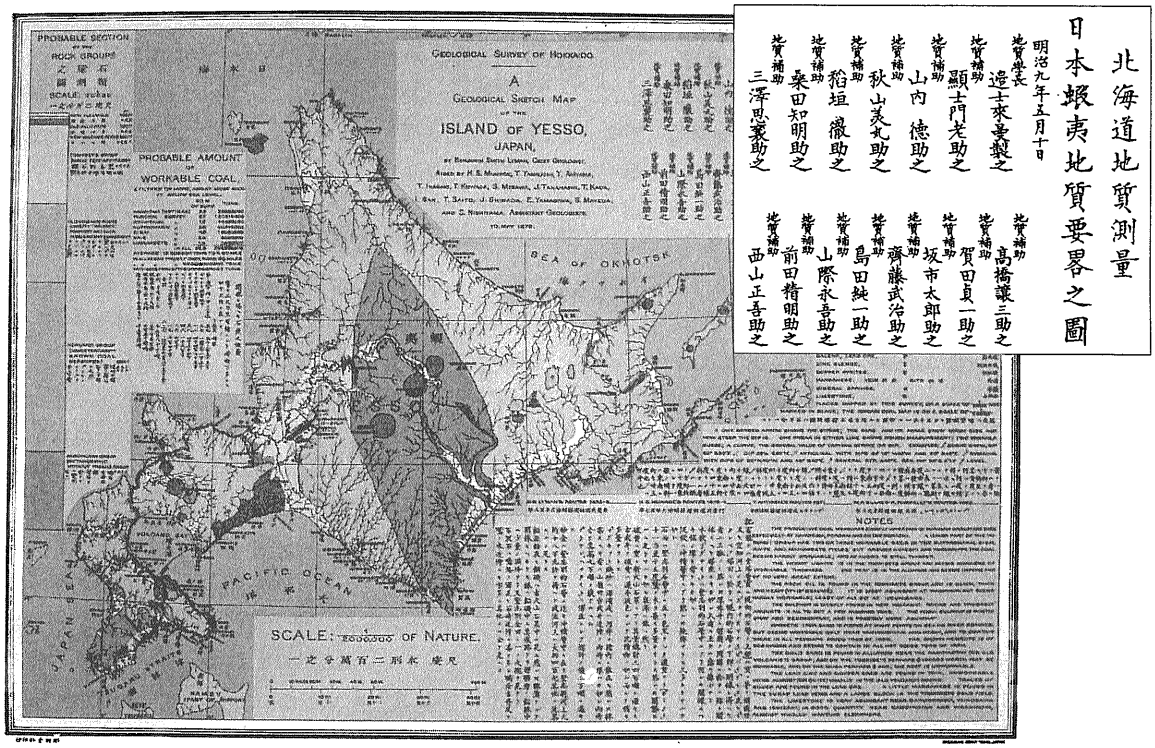

27 May 1876.
Worked at Kaitakushi Office until 12:00 + wrote something for the Biblio Report.
The young men went to the Kuwangyoryo by appointment at 9:00 + about 11:30 came and reported to me as geological assistants according to instruction they had received yesterday, Inagaki, Kuwada, Takehuchi, Kada, Bau, Shimada, Yama

第3図　ヤングメン正式に地質助手に任命される（ライマンのフィールドノートより．マサチューセッツ大学図書館蔵）

当日，助手たちが開拓使へ呼ばれ，内務省勧業寮転任を命ぜられた．その足で勧業寮試験場の大鳥圭介にあいさつに行き，大鳥から，すぐライマンに口頭で任命を報告するよう指示された．「ライマン先生に早速知らせよう」と頬を紅潮して駆けるようにして歩く8人の助手たちの姿が眼前に浮ぶ．彼らの報告を聞くライマンの喜びは，如何ばかりであったろうか！27日，勧業寮で新任式が行われ，稲田・桑田・高橋・賀田・嶋田・山際・前田・西山・三沢の9名が正式に地質助手に任命された．三沢は病気で式に出席できなかった．山内徳三郎は，すでに内務省八等出仕の役人で助手主任に任命されていたのを付け加える（第3図）．

2. ライマンと三沢思襄

日本蝦夷地質要略之図（第4図）を「地質図の内容としては比較的大まかなものだが，当時の科学水準としては驚異的なもの」（注2）と清水靖夫氏は評された．この独特で美しい地図は，チームワークの精魂の結晶とも言えよう．ずっと以前，山際永三氏が地図に助手たちの名前がライマンの名と同じ大きさで書かれているのを指摘され（第4図），目から鱗が落ち，助手たちの目で，ライマンを書くことができるのではないかと思った．大体に，地図には，出版者か編集の名が代表し，協力した人々の名はなく，このように，ずらりと助手たちの名が並び，しかもライマンと同じ大きさで書かれている地図は，希有であろう．日本蝦夷地質要略之図に書かれた名は，來曼（ライマ



第4図　日本蝦夷地質要略之図と調査団名

ン)，門老(マンロー)とかぞえ，最後の西山正吾で15名，その中の高橋譲三は，後に養子となって杉浦と改姓した．斎藤武治については，明治8年病気退職のみで，第一回北海道地質調査後，暗の中へ消えてしまった．明治初期の無名氏を探すのはとても無理だと，断念せざるをえなかった．三沢思襄の場合も，「明治10年病気退職，若くして病没した模様である」(注3)と，同じく微々たる資料だったが，覚束無い足跡が残っていたので，それを辿って行ったら，思わぬ逸話が展開した．

ライマンは，第一回北海道地質測量調査のため，明治6年4月21日函館に到着，札幌で石狩川増水によって予定を変更し，余市・岩内・堀株と南下し，茅沼炭田調査を開始した．同時に助手たちに初歩の測量・地質・鉱物学の速成教授を行った．彼らは稲垣・桑田・三沢・高橋・賀田・坂・斎藤の7名で，嶋田・西山・前田・山際の4名は第2回目からの参加者である．才気あふれ，忍耐強く，誠実で勤勉，その上，海綿の様に新知識を吸収する助手たちを通し，教師の職業をきらって，地質技師になったライマンは，初めて教える喜びを味わった．茅沼の測量実習および雨天日の授業が約20日で終了し，6月16日，稲垣・三沢・賀田・坂の4人は，マンローグループに編入され，金の調査の目的で，利別方面へ出発した．その後，ライマングループは，石狩・後去・胆振・渡島と踏査，調査を終え11月1日に函館へ帰還した．3日天長節の日，函館山も港も雪に被われた．ようやくマンロー隊が，7日午後の函館に帰着し，翌日は，地質測量チームの慰労晩餐会が開かれた．三沢がライマンと一緒だったのは，慰労会を入れて，大まかに数えても，1ヵ月足らずでなかったろうか？

翌年，明治7年(1874年)6月15日，降り続く雨で上川盆地横断旅行の壮途が遅れ，待機中，ライマンは，突然病弱のため江戸に残った三沢から手紙を受け取った．彼はライマンが指示した博物館の仕事の指令を待っていたが，待てども開拓使から連絡がないので，勇気を降り起して，英語で依頼状を書いたらしい．ライマンの返事の草稿が現存し，なかなか興味深い．要旨は，黒田清隆の3月30日付の手紙で，博物館と倉庫の管理がライマンに移ったので，三沢の職務を文書にする必要がないと思ったこと，5月17日の手紙で，大鳥がライマンの手はずした仕事を

三沢がすることを容認したこと，そしてこれから，職務を文書にして三沢に渡すよう，早速大鳥圭介に書く，と簡単明瞭な内容だが，書面のそこかしこに見られる削除や追加から，草稿の醍醐味を楽しめる．つまり，三沢の手紙を読んで即刻書いた草稿から，ライマンの刹き出した心の動きを，心電図の波を見るように，はっきり読むことができる．三沢の心配を払いのけよう，彼の博物館の仕事がうまく行くよう，彼に希望を与えようと，紙面に，ライマンの思いが駆け巡る．例えば，あまり詳細に指示した文を，大きな線を交差して抹殺したのは，三沢と開拓使役人の間に摩擦を生じるのではないかと，懸念したのだと断言できよう．病気で江戸に留まざるをえなかった三沢の心情への思いやりが，草稿一面にみちあふれている．

約45日で，上川盆地・十勝平野の大調査をやりとげ，帯広に滞在中，三沢の朗報を手にした．ライマンは，彼の仕事が順調なのを喜び，ライマン案のアイヌ民芸品の収集が軌道にのったので，やがて，博物館の仕事が面白くなるであろうと，三沢を励ます返事を書いた．

第三回北海道地質測量調査で，三沢は元気な姿をみせた．しかし翌年明治9年5月27日に勧業寮で行われた地質助手の新任式には病欠した．伯母ミセス・レスリーに送った3月23日の手紙に，「10名の蝦夷で共にした助手たちと出かけます（越後油田調査筆者註）．但し三沢は，今夏リューマチで行けませんが，後から我々に加わるでしょう」とあり，ライマンは彼の病気に至って楽観的だった．

当時，三沢の病状を見守っていた一人に山内提雲がいる．最初，彼が，R. Yamauchiと署名し，山内徳三郎の兄と言うだけの影の薄い開拓使役人と思った．しかるに，明治9年発行の官員録を見ると，開拓使のトップが黒田清隆，次が西村貞陽，続いて札幌本庁勤務の堀基，4番目が山内提雲で，きら星の一人ではないか！　更に驚くのは，ライマン資料を調べている中に，彼がライマンに大いに好意を持っていたことである．根室事件後，反ライマン的雰囲気の開拓使内で，このような態度をとる人は余程の人物ではないだろうかと調べてみたが，「山内提雲の生涯」（鉄鋼界昭和45年12月号）以外に資料がなく，残念にも雑誌を入手できなかった．だがあきらめ切れず，提雲が明治初期に珍しく近代的思考力を持っているので，海外留学経験者ではなかろうかと，石附実「近代日本の海外留学史」に当ってみた．果せるかな，提雲の名が見つかった．慶応3年（1867年）パリ博覧会へ将軍名代として水戸藩徳川昭武が派遣された一行の若干の青年たちの一人で，曰く，「……山内六三郎（提雲，小十人格，砲兵差図役勤方）らが留学生に命じられ……」（注4）の貴重な資料を得ることができた．ついでに，今までわからなかったR. YamauchiのRの疑問が解けた．本の「幕末の海外留学者リスト」によると，彼は山内豊城の三男で，慶応3年にフランスへ行き，1年後，明治元年に帰国，幕臣で，沼津兵学校一等教授，宮内官，鹿児島県知事と経歴の巾が広く，何となく彼の器量がうかがわれる．ちなみに，山内作左衛門（提雲の兄？）は，資生堂の創業者として知られる．

ライマンは，越後への途上，6月15日，信濃の一ノ沢近くで落馬して，足と腰を痛めた．約1ヵ月静養した後，セダンチェア（輿）で越後入りし，8月初め出雲崎で助手たちに測量実習を指導していた頃，次の手紙を山内提雲から受け取った．

次の出来事をお伝えするのは，真に欣快の至りです．あなたはきっと喜ばれることでしょう．今月4日（昨日），正院へ地質調査地図を持っていき，三条（実美　筆者註）太政大臣の面前で説明しました．私は地質学や地質調査の知識は全くありませんが，報文である程度，詳細を知っていますし，開拓使で説明する人は誰もいません．それでこの仕事を引き受け，地図の解説をしました．太政大臣が，誰が作成したのかとお聞きになったので，ここぞと，あなたの名と助手たちの名を申し上げました．また，太政大臣は間もなくご自身で，これらの地質や地形図を作成するのに，どんなに苦労したか，おわかりになるでしょうと申し上げました．大臣は印刷された地図を，大へん興味深くごらんになりました．「日本蝦夷地質要略之図」は，実にすばらしい地図です．

太政大臣・寺島（宗則）・伊藤（博文）・山県（有明）各卿，総員35名が，明日，灯台寮所有のテーボ号で北海道へ出帆されます．函館に上陸し，新室蘭へ行き，新道を通って札幌へ到着．それから石狩炭田を訪れ，上川までおいでになります．この難儀な旅の後（実際に，大臣や卿の方々には，苦難の旅です），小樽へ向われ，蒸気船で，Amamori（青森？）か多分酒田へ渡り，行幸されなかった出羽等の日本の北

部を旅されます.

無事, 出雲崎へ到達されてなによりですが, 足の回復が遅いのが心配です. 近日またミスター三沢を見舞いました. 彼は大へん良くなり, とても元気ですが, 足が完全によくなるには, もう少し休養しなければなりません.「足を動かさないように.」は, 彼に, 多分, あなたにとっても, 良い助言と思います.(中略) マサチューセッツ農科大学学長W.S.クラーク教授が2人の助手を引き連れ, 来日し, 札幌農学校設立のため, 北海道へ向われました. 成功を祈ります.

敬具

R. Yamauchi

ライマンは, 越後油田地質調査を終え, 11月8日, 浄運院の自宅に戻った. しばらくして, 山内徳三郎と家探しをやり, 年の暮近く, 平河町5丁目17番地の新居に移った. 修理に追われ, やっと落着いた2月の始め, ショックな知らせを受けた.

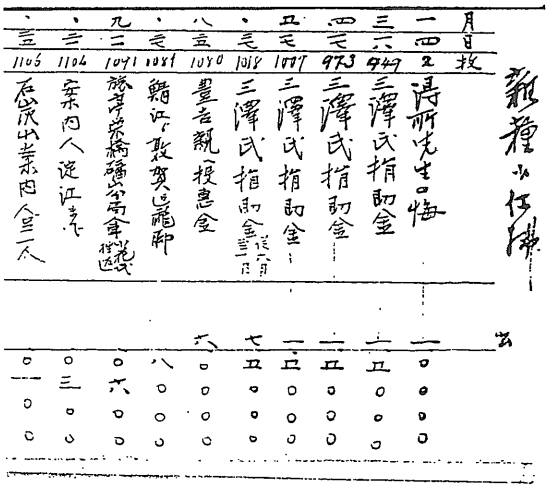
4 Feb. 1877

My dear Mr. Misawa,

昨日, 医師が, あなたの悪い方の足を切断しなければならないと言っていると聞き, 心痛にたえません. 何たることでしょう!　あなたは勇気がある人です. 悠然として, 苛酷な切断を甘受されることでしょう!　当節は, 幸にエーテルのおかげで, 手術の痛みは感じませんし, 義足は, 大へん精巧なので, そんなに不便ではありません. 有名なドクター松本(松本良順?筆者註)は, 隻脚ですが, 杖なしで歩いていられると聞きます. 結局, 手術が成功したら(疑いなく, 現代の熟練した外科医がやるのです. 戦場で行われるような荒っぽい切断ではありません), 数週間で回復するでしょう. 多分地質調査は無理ですが, 心身共, 大へん元気になられると思います. 優秀な頭脳と地図作成するのにもってこいのデリケートで器用な手を用いて, すばらしい仕事ができます. 右腕でなく右足で, 本当に幸です.

風邪がよくなったところです. 無理して冷えた中を, 人力車で遠くまで行ったら再発するのではと恐れ, 今日は, お見舞いに行くのを失礼します.　敬具

ベンジ　スミス　ライマン



第5図　雑種家計簿マサチューセッツ大学蔵

明治10年病気退職は, 手術後と思われる. 明治11年家計簿選帳に, 三沢氏捐助金, 1円50銭とあり, 毎月払われているのに気がついた(第5図). 明治12年11月12日, 捐助金が餞別3円に変った.

山際永吾氏は, 写真添書に「信濃国埴科郡松代殿町産, 嘉永五壬子歳十二月生, 号春暉　三沢思襄 明治12年12月3日死　克襄院ト号ス」と書かれ, 北海道地質測量調査の仲間を追悼された.

明治35年(1902年)5月25日付嶋田純一への手紙で, ライマンは「Poor Misawaの死後, 約25年後, 始めて我々メンバーの一人を失った」と稲垣徹之進の死を追悼された. ライマンの実感通りに, Poorをうまく訳せないので, そのままにするが, Poor Misawaは四半世紀(正確には22年余り; 筆者註)ずっとライマンの心中に生き続けていたのである.

注

1) 佐川栄次郎(1921):ライマン氏を憶ふ. 地質学雑誌, 28, 40-54
2) 清水靖夫:ライマンの北海道地質図. 古地図研究, 48,19.
3) 今津健治(1979):B・S・ライマンの弟子たち. エネルギー史研究, No.10,114.
4) 石附　実(1992):近代日本の海外留学史. 中央公論社, 131.

FUKUMI Yasuko (1996): A note on Lyman (12) – Lyman and his assistants.

<受付:1996年6月7日>